

外科医による外科史

——マルゲーニユの場合——

大村 敏郎

ジエゼフ・フランソア・マルゲーニユ (J. F. Malgaigne,

1806~1865) は十九世紀中期に活躍した偉大な外科医の一人である。しかし今日われわれが知っているのは骨折の際の疼痛点とか、骨盤骨折とか鼠径部の線などマルゲーニユの名がついたものがあるお陰である。外科医として技が優れていただけでなく、学者として視野が広く、例えばフランスにおけるエーテル麻酔を最初に取り入れた外科医といわれ、手術成績を表現するのに統計的な手法を用いたり、また外科雑誌の創刊を手掛けたり多彩な活動をしている。

さらにギリシヤ語・ラテン語・ヘブライ語など古典語に優れた語学力をそなえ、一方では説得力のある表現を用いて多数の文献を書いている。なかでも医学史を無視してはいけないと熱をこめて強調した人でもある。

彼の行った事業の一つにアンブローズ・パレ (Ambroise Paré, 1510~1590) の全集の再編集復刻がある。一八四〇~四一年に三冊本として出版したのだが、これはパレ全集完全本と呼ばれ、一旦影のうすくなっていたルネサンスのパレ外科を蘇らせ、医学史上に定着させ、今日になぎとめる大きな役割を果たしたものである。

昨年このマルゲーニユの完全本をもとに、その一部であるパレの骨折篇と脱臼篇をフランス語から翻訳する事業に演者は参加し、細かくパレ全集を見なおすことが出来たと同時に、そのパレの仲介者であるマルゲーニユの生涯と姿勢に強い関心を持ったのである。

マルゲーニユは一八〇六年、東北フランスのボーージュ県シャルムで生れた。父は臨床医であると同時に地元の衛生官を兼ねており、息子に跡を継がせたかったが、十五才から四年間ナンシーで医学を修めたあとパリへ出ていった。

ここで医学を一層深めるかたわら文学的興味、古典語への理解、雄弁術を身につけるのである。二十一才で「人間の音声の新学説」で学位をとり、次いでバル・ド・グラスの外科学校へ入学する。一八三〇年に「視覚に関する新学

説」、翌一八三一年には「医学における学説と実践のパラドックス」を発表し、その中で医学生には歴史と文学の教育が必要であると説いている。サン・ルイ病院とシヤリテ病院で教育と臨床を行い、一八三四年「手術外科マニユアル」を出版。一八三五年教授資格者となるが外科教授の座についたのは一八五〇年である。一八三八年「外科解剖と実験外科」、翌年「オテル・ディユ病院における一七九〇年以後の骨折と脱臼の統計的研究」を発表した。因みに一七九〇年頃のオテル・ディユは有名な外科医ジョゼフ・デソー (Joseph Desault, 1738~1795)——日本では「デゾー」と呼びならされているがこれは誤り——がフランス革命により医学部も外科学校も閉鎖された中で一人外科臨床と教育に大活躍していた時代で、次の華々しいフランス外科を担う人々の育った時代であるが、創感染に対する方策がなく手術成績は惨憺たるものであった。

パレ全集の復刻をしたのは一八四〇年で、意慾にあふれるマルゲーニユの外科史への出発点でもあるが、この年に彫刻家ダビッド・ダンジェーによるパレのブロンズ像が生地のラバル市の広場にたてられた。パレの没後二百五十年

を記念するという一つの区切りを意識したマルゲーニユの心憎いばかりの配慮がみられる。

マルゲーニユのその序文の中に六世紀から十六世紀までのパレ以前の外科史を語っている。特に引用したいのはその初めの部分で、「科学史は長い間われわれに無視されてきた。特に内科に比べて組織的に弱い外科では、一つの学派、一つの時代の狭い限られた所に閉じこもっているのがいかに危険であるか判ってきた。すべての国のすべての世紀の業績を見渡してみること、すなわち未来の道を確かめるために過去の道を明らかにすることが必要である。」

そしてまた「パレは私にとって孤立した一外科医ではない。時代の先頭に立つ代表的な人物であり、私はパレをその時代全体と共に語りたいと思った。」と書いている。

マルゲーニユのパレ全集に加え注釈は当時の第一線の外科医の目と、時代の背景をしっかりとついでいた歴史家の目と、さらに生涯に沢山の文献といくつもの版を残したパレ全集を丹念に調べた書誌学的な目によってしっかりと支えられた見事なものである。

一八六二年に引退し三年後の一八六五年にマルゲーニユ

はこの世を去った。

マルゲーニユの精神に則って、アンブロアズ・パレの没後四百年をめざして、日本に大きな影響を残した外科の源流の正しい評価をしたいと考えている。

(慶応義塾大学・医史学研究室)

パレ全集の骨折篇・脱臼篇でみる キリスト教思想

我部 正彦

フランスの十六世紀の大外科医アンブロアズ・パレ(一五〇〇～一五九〇)については、「われ包帯し神これを癒し給う」という名言で広く医学史上にも名声をはせているが、高遠な人格と疾病の治療機転を「自然と神の力」に帰したことで、医療にたずさわる敬虔な姿勢が世界の人々の心を捕らえている。

アンブロアズ・パレについての研究は、大村敏郎氏の数々の論文で発表されていて、このパレ全集がフランスで出版されたのは一五七五年で、オランダを通して日本へ入ってきたのが一六七〇年頃である。

今回(昭和五十九年十月二十八日)、約三百年振りにパレ全集(マルゲーニユ版一八四〇―四一刊)の一部ではあるが、骨折篇・脱臼篇を大村敏郎氏の監訳・東京都柔道接骨師会訳